
原著論文

クーゼのケアリング論に対する批判的検討
—ノディングスとの対比において—佐藤 聖一¹⁾, 阿久津 滝子¹⁾, 岩崎 保之²⁾An examination of Kuhse's critical theory of caring
—Comparisons with Noddings' theory

Seichi Sato, Takiko Akutsu and Yasuyuki Iwasaki

Caring is one of the most important concepts in nursing. However, there are also some criticisms towards caring in nursing. Thus, in this study, we examined the theory of caring in nursing proposed by Kuhse, a typical researcher who had criticisms towards caring in nursing, and compared that theory with the theory of caring proposed by Noddings. The results showed that although Kuhse's theory admitted that caring was an important element in nursing, he pointed out the danger in forming too close of a relationship because it may lead to a decline in fairness and there may be risks of arbitration. He believed that the construction of relationships based on the "roles" of the one-performing-caring and the one-being-cared-for to be more important than constructing an ideal close relationship. Therefore, if we understand caring in nursing to be an attitude that nurses have in which they try to build a caring relationship while taking both the natural caring from Noddings' theory and ethical caring into consideration, then it will be possible for nurses to perform caring without being subject to Kuse's criticism.

1. はじめに

ケアリングは、メイヤロフの著書『ケアの本質』の発刊以降、様々な領域でその重要性が議論されている¹⁾²⁾。しかし、ワトソンは、「ケアリングは、ケアリング理論の曖昧さとともに、非常に大きなパラダイムの中にある。」³⁾と述べており、また、佐藤はケアと比較したうえで「ケアリングに関する統一的な解釈は今後も検討の余地がある」⁴⁾と指摘しておりケアリングにはいまだ統一した概念はないといえる⁵⁾。

そのような状況にあってもケアリングが看護にとって重要であることを示すように、日本看護協会は、ケアリングを看護にかかわる主要な用語と位置付けて「1. 対象者との相互的な関係性、関わり合い、2. 対象者の尊厳を守り大切にしようとする看護職の理想、理念、倫理的態度、3. 気づかいや配慮が看護職の援助行動に示され、対象者に伝わりそれが対象者にとって何らかの意味(安らかさ、癒し、内省の促し、成長発達、危険の回避、健康状態の改善等)をもつという意味合いを含む。また、ケアされる人とケアする人の双方の人間的成长をもたら

すことが強調されている用語である。」⁶⁾と述べている。

このような状況の背景には、従来行われてきた医学的治療の視座を中心としたケアの倫理では充分に対応できなかった患者一人ひとりへの個別性のある対応や、患者－医療者の関係ではなく、人間対人間の関係性を求める社会的ニーズに対応する形で、人間対人間の関係性に着目したケアの倫理への移行に伴いケアリングを行うことこそが看護の中心的概念と考える議論が沸き上がったと考えられる。

ケアリングは看護において重要な概念の一つであることが認められている現状がある。しかし、看護におけるケアリングを否定的に考える理論家もいる。クーゼである。

クーゼは、オーストラリアの生命倫理学者である。彼女は前モナッシュ大学生命倫理センター所長であり、看護師の倫理的問題について研究してきた過程で看護におけるケアリングの問題点について提起する。彼女はケアリングを看護に必要な性向であることは認めつつも、ケアリングを看護の倫理に据えることには反対している⁷⁾。

しかし、ケアリングが哲学や教育、看護において中心的概念であることに伴い、これまでクーゼのケアリング論について、ほとんど取り上げられていない。クーゼは著書『ケアリング看護婦・女性・倫理』において、ノ

1) 国際医療福祉大学保健医療学部看護学科

2) 京都女子大学発達教育学部教育学科

ディングスのケアリング論を取り上げてケアリングについての批判を展開している。

そこで、本論では、ノディングスのケアリング論とクーゼのケアリング論を対比させることで、クーゼのケアリング論の概念について論考することを目的とする。

II. ケアリングとは何か

1. ノディングスのケアリング論とクーゼのケアリング論

メイヤロフはケアリングについて「一人の人格をケアするとは、最も深い意味で、その人が成長すること、自己実現をすることをたすけることである。」⁸⁾と述べる。メイヤロフはケアリング論について、連続した相互関係の中で行われる行為によって相手の自己実現を目指すことがケアリングの本質であるとしている。

メイヤロフのケアリング論に依拠しながらもノディングスは、メイヤロフのケアリング論について、主にケアする人の視点に立っていると指摘し、「わたしは、他のひとの実現を強調するのは、ケアするひとの中で続けられているものの説明を、あわてて見過ごすことにもなりがちだと思うからである。」⁹⁾と述べている。この観点はメイヤロフとノディングス双方のケアリング論の根幹といえる考えである。しかし、ケアリングに対する基本的な考え方においてノディングスとメイヤロフは、ケアの主体について相違がある。ノディングスは、メイヤロフのケアリングに対して、ケアする人に注目しすぎていると批判し、ケアする人の重要性を認識しながらも、ケアされる人の重要性について追究している。

クーゼは、ノディングスのケアリング論について、「人間関係に根差したケア」という概念を否定することになると述べる一方で、ノディングスがケアリングの重要な要素としてあげている専心没頭については、「気質をそなえたケア」として患者や看護師に役立つ倫理の必要条件ではあるが、十分条件ではないと述べ、ケアリングと並ぶ必要条件として公平と正義を挙げている¹⁰⁾。

また、看護師の述べるケアリングは、個々によって「言葉の理解が異なっている」ことを指摘し、看護師と患者の出会いを特徴づけるような感情や感覚、気質を指すものだということはおおむね一致している¹¹⁾と述べる。クーゼはノディングスのケアリング論における主要な概念を重要と認めながらも、看護におけるケアリングの在り方については批判的な考えを示しているといえる。

2. ケアリング論の中心的概念

1) メイヤロフのケアリング論

ケアリングは密接な人間関係を基盤とした関係性の中に発揮されるものであるとされる¹²⁾。そこで、ノディン

グスのケアリング論とクーゼのケアリング論、両論におけるケアする人とケアされる人の関係性を検討したい。

ノディングスとクーゼのケアリング論の前提として両者のケアリング論に影響を与えたメイヤロフのケアリングについて概観しておく。

メイヤロフは、ケアリングが行われる一連の過程において他者を自分自身の延長の様に考えとし、「私自身が他者の成長のために必要とされていることを感じとる。私は他者の成長が持つ方向に導かれて、肯定的に、そして他者の必要に応じて専心的に応答する。」メイヤロフはケアリングにおいて、大勢の中のひとりではなく、今そこにいるひとりとしてケアされる人をとらえている。そのうえで、「他者の立場に立つことや、他者が自分であったならばと」¹³⁾置き換えるといった思いではないと述べる。

そして、「自分自身を実現するために相手の成長をたすけようと試みるのではなく、相手の成長をたすけること、そのことによってこそ私は自分自身を実現するのである。」¹⁴⁾と述べ、ケアリングの成立についてメイヤロフは、ケアリングがケアされる人にとって必ずしも受け入れられるものとは限らないし、ケアリングが達成されないこともあるという。

すなわち、実践されるケアリングがケアされる人の自己実現にとって満足の得られる適切な状態とは限らないことが生じるのである。そして、ケアする人は、ケアリングの失敗や困難な状況を経験することを通して、ケアリングが他者の自己実現にとって適切なものとなるように関係性を構築していくという過程においてケアする人も、ケアされる人も成長していくとしているのである。

2) ノディングスのケアリング論

ノディングスは、メイヤロフのケアリングについて「他のひとの実現を強調するのは、ケアするひとの中で続けられているものの説明を、あわてて見過ごすことにもなりがちだと思うからである。」¹⁵⁾とした。ノディングスのケアリング論の中心的概念は、専心没頭と動機づけ転移である。

専心没頭についてノディングスは、「ケアリングには、専心没頭が含まれている。専心没頭は、熱烈である必要はないし、ケアするひとの生活にみなぎっている必要もないけれども、それが生じなくてはならない。」¹⁶⁾であり、「ケアリングには、自分自身の個人的な準拠棒を踏み越えて、他のひとの準拠棒に踏み込むことが含まれている。ケアするとき、わたしたちは、他のひとの観点や、そのひとの客観的な要求や、そのひとがわたしたちに期待しているものを考察する。わたしたちの注意、心的な専心

没頭は、ケアされるひとについてであって、わたしたち自身についてではない。」¹⁷⁾と専心没頭の重要性を述べており、ケアする人がケアリングを実践するための第一歩であるとしている。

専心没頭から生じるケアリングの実践に引き続いて起こるとされる動機づけ転移について、ノディングスは、「わたしがケアするとき、これまで論議してきた方法で他のひとを受け容れるとき、感情以上のものが存在している。つまり、動機の転換もまた存在しているのである。」と述べる。さらに、「わたしを動機づける活力は、他のひとに流れ込む。かならず流れ込むわけではないけれども」と断ったうえで、おそらく、そのひとの目的に流れ込むであろう。わたしは、自分というものを放棄しない。わたしは、自分の行いを大目に見ることはできない。しかし、わたしは、わたしを動機づける活力が共有されるのを認める。つまり、わたしは、その動機づける活力を、他のひとにも活用できるようにするのである。」¹⁸⁾すなわち、ノディングスは、ケアリング関係の成立には、単にケアしケアされるという関係性に加え、ケアされる人にも、ケアする人の「ケアしたい」という動機が伝播することを理想としており、それが動機づけ転移であると述べている。

3) クーゼのケアリング論

クーゼは、ケアリングを医師と看護師との関係性における倫理的乖離を基盤として論じており、その議論の中に看護におけるケアリングを論じている。

クーゼはケアリング論の中心的概念について、「他者が必要とするものに備えること」、「他者が置かれている健康に関する現実を理解しようと心を開き構えること」と規定し、これをクーゼは「気質をそなえたケア」¹⁹⁾と呼ぶ。

すなわち、クーゼは、ケアリングが看護において重要な要素であることを「気質をそなえたケア」として認めながらも、「ケアリングは、自分の経験と感情を根拠にするため自分の主観にはまりこみ、ケアによって言葉を失うことになる。」²⁰⁾と述べ、あまりに密接な関係性に陥ることの危険性について述べている。

クーゼの考えでは、メイヤロフやノディングスが述べるようなケアされる人とケアする人の密接な関係性に根差したケアは、理想的ではあるものの現実的ではないとする。患者との密接な関係性の中に発揮するケアリングは稀に起こるかもしれないが多くの場合ほとんど達成不可能な目標に看護師のエネルギーを向かわせる必要はないと述べている。

クーゼは「気質をそなえたケア」(ケアリング)には、「受

容性と感受性(反応する能力)」が重要であり、「患者への傾注しようとする意欲」と「個別的な特定の人や状況がもつ特殊性が大事」であると、これらをそなえた看護師を「気質をそなえたケアの提供者」として位置づけ、「気質をそなえたケアの提供者」は、患者を「単なる機能不全に陥った有機体としてはなく、特定のかげがいない他者としてつまり固有のニーズ、信念、望み、欲求をもった個人として認識される」²¹⁾と述べている。これは、メイヤロフやノディングスのケアリング論の根幹をなす考え方に等しいといえる。

しかし、クーゼはケアリングの関係性について、「一つの気質としての、あるいは道徳的姿勢や性格的な徳としてのケアは患者に対してよりよいケアを行う上で欠かせない要素」であるとした上で、これを看護倫理の一部であると考え、倫理の一部であるならば公正主義の倫理によって体现されるべきであるとし²²⁾、また、ケアリングの個別性について、「普遍的な倫理原則をすべて拒否して一貫性を失うならば、その時私たちに残されるものは、ただの恣意性と気まぐれだけである。」²³⁾と述べている。

クーゼはケアリング関係の構築についてケアリング概念の重要性は認めつつも、あまりに個別的で密接な関係性においては公平や正義といった倫理的問題が生じることを危険視しているのである。また、クーゼによれば看護師という専門職は「気質を備えたケア」を身に着けている人々であり、患者をケアしなければならないという使命感のようなものを持ち合わせており、その「道徳的な動機」だけにケアリングが依拠するのならば、ケアする人である看護師は疲弊したり、場当たり的な対応にとどまり、メイヤロフやノディングスの理想とする、「ケアする人」と「ケアされる人」双方の成長といったケアリング関係は望めないと考えているのである。

ケアリングにおける密接な関係性について否定的な見解を持つ、教育学におけるケアリング研究者であるハルトも「子ども(生徒)－教師の関係性」における教師の役割としてのケアリングについて同様の指摘をしている。ハルトは、メイヤロフが著書で示している「子ども(生徒)－教師の関係性」の例を批判的に検討している。

ハルトは、密接な人的関係性は「ときどき起こるかもしれないし、望ましいかもしれないけれども、ほとんどの教育学的脈絡は、そのような関係性を望ましくはあっても、もっともらしいものにはしない。」としケアリングを役割関係性においてとらえることが教師にとって専門的に義務があるものと述べて²⁴⁾。この見解に対しては日本の教育学者である篠原も、「個性の理解は教育の

重要な条件であるが、それ自身教育ではない。教育学の示す一般原理を、個性と個性のおかれた環境に照らし合せて適宜にしかも即座に応用するところに教育の技術は存し、個性の理解は其の一つの契機（重要ではあるが）たるに止まる」²⁵⁾と述べている。

ハルトは、この教師としての専門的義務として「子ども（生徒）－教師の関係性」を3つの認識水準に分けて論じている。すなわち、第1の認識水準を、「個性を理解し尊重する」という「子ども（生徒）理解」、第2の認識水準は、子どもを尊重されるべき一人の人間として認めるという「人格水準」、第3の認識水準は、教師は生徒を単純に生徒として認識する「役割保有者」としての水準であるとしている。

そして、ハルトは、これら3つの水準を教師は「役割」としてとらえ、教育を実践していくことが重要と述べた上で、子どもの学習活動について、教師が子どもの要求に応えることや、子どもの目標が達成できるよう援助することであるとしているのである²⁶⁾。すなわち、クーゼらのケアリング論は、メイヤロフやノディングスが第一義的にとらえる「密接な人間関係」の理想的な構築よりも、ケアされる人とケアする人それぞれの「役割」に基づく関係性の構築を重要ととらえているといえる。

Ⅲ. ノディングスとクーゼのケアリング論における関係性

1. 自然なケアリングと倫理的なケアリング

ノディングスのケアリング論の特徴として専心没頭と動機づけ転移の他にもう一つ、ケアする人がケアリングを実践する際に想起するケアリングの種類として「自然なケアリング」と「倫理的なケアリング」がある。

ノディングスは、ケアリングにおいてケアする人に最初に生じる感情を「私がしなければならない」という義務感であるとしながらも、その感情には、義務感を生じさせる感情があるとしている。そのことをについてディングスは、「最初の感情は『わたしはしなければならない』である。それが、『わたしはしたい』から区別されずに生じるとき、わたしはたやすくケアするひととして進む。」²⁷⁾と述べており、ケアされる人に対して、ケアする人が「私がケアしなければならない」という感覚と同時に、ケアしたいという感覚が内在するケアリングをノディングスは自然なケアリングと呼んでいる。

この自然のケアリングについてノディングスは「わたしたちが、愛や、心の自然な傾向から、ケアするひととして応答する関係である」²⁸⁾と述べ、自然なケアリングとはケアの対象者を目の前にした時、ケアする人として

自然にケアしたいと思うような感であるとしている。

これに対して、倫理的なケアリングについてノディングスは「わたしが主張してきたのは、自然なケアリングが失敗するとき、他人のための動機づけの活力は、倫理的な自己をケアすることから奮い起こされるということである。倫理的なケアリングは、先に叙述したように、規則や原理に依存するのではなく、理想それ自体の発達に依存する。それは、自己についてのどんな理想にも依存せず、ケアすることと、ケアされることをひとが最もよく思い出すことと一致していて、発達する理想に依存するのである。」²⁹⁾と述べる。

さらに自然なケアリングと倫理的なケアリングの関係について、「わたしたちは、倫理的なケアリングが自然なケアリングよりも高次であるとする立場に立つわけではない。ケアリングに基づく倫理は、ケアする態度を維持しようと努力し、したがって、自然なケアリングに依存しているのであって、それを越えるのではない、」³⁰⁾と述べている。

すなわち、ケアすべき相手に対して、ケアしたいという感情の想起がなくとも専門職として、ケアしなくてはならない場面に遭遇した場合においては専門職としての責務として生じるケアリングを倫理的なケアリングとしている。

ノディングスはケアリングにおいて、根源的に重要とされるケアリングは、自然なケアリングであると述べる。この自然なケアリングが生じるのは、ケアする人の記憶や経験に内在する「ケアし、ケアされた」というケアリング関係の記憶や経験であり、それらを基にしてケアされる人へと働きかけていくとしている。

また、倫理的なケアリングについて、ノディングスは、原理や規則が、倫理的なケアリングの一番重要な指針であることを否定し、さらに、ケアリングは個別的状況であるために、同じような状況がほとんどないとして、普遍化可能性も否定している。ノディングスはケアされる人とケアする人の相互関係性の中における、喜びや嬉しさといった感覚をケアする人の倫理的理想を支えるものとしているのである。

2. ノディングスに対するクーゼとハルトの指摘

クーゼはノディングスの著書における例示に対して批判的な指摘を展開している³¹⁾。確かに、クーゼの述べるように、看護師が感情的側面にのみ傾倒し、ケアする人の恣意性のみでケアされる人をケアするならば、平等や公正な看護を提供することは困難である。また、クーゼは、ノディングスの否定するケアリングの普遍化可能性について、ケアする対象の善さの性質を知りながらもケ

アの恣意性に陥らないように対処するためには普遍化可能な原理とルール、公正の原理が必要であると述べる³²⁾。

クーゼの言うように、公平性を主張するならば、ケアする人と、ケアされる人との関係性の中で行われるケアリングに即して考えれば、他と同じ状況はないといえる。また、ほとんど同じというような状況が存在したとするならば、ほとんど同じという対応をしなければならない。これはノディングスらの述べるケアリングとは異なるものとなる。

クーゼはこのような命題を踏まえ「義務を負うのは個別的な特定の人間であるということと、そのような義務そのものの普遍性を混同してしまったためだと思われる」と述べ、ノディングスが普遍化可能性を否定した理由を推察している³³⁾。このクーゼの指摘には複数の研究者が妥当であると指摘している³⁴⁾³⁵⁾。クーゼの述べるケアリングにおける立場からするとクーゼは道徳判断では普遍化可能性が重要な基準であるとしている。

また、ギリガンもケアの倫理の第三水準として脱習慣的水準をあげ、この水準ではケアされる人のニーズだけではなく、ケアする人のニーズ(成長)や自己へのケアが含まれるとし、これを乗り越えていくためには、ケアリング倫理の普遍化によって慣習的水準を脱し、普遍的道德原理に基づく水準が重要であると述べている³⁶⁾。このようにケアリングの普遍化可能性についての議論は諸説あげられる³⁷⁾³⁸⁾。ケアリングの実践が恣意と気まぐれによって流されるのであれば、それは専門職である看護師の行うケアリングと言うことができないであろう。

しかし、看護におけるケアリング研究の先駆的研究者であるベナーは、「看護師であることとして、自分の自然科学や分文化学、テクノロジー、そして倫理を行動に移すことができる。そして、その知識を与えられた状況において認知し、行動する能力へと変容させることができる」³⁹⁾と述べ、さらに、専門職としての看護師は、「特定の患者ケアに関する懸念、要求、資源、成約に従って、自己の知識とスキルをつねに統合している。特定の患者の状態や状況を通して論証する力は、看護師にとって核となるスキルである。」⁴⁰⁾と述べており、看護師が専門職としての役割を担うためには、エビデンスにそった看護が必要であることは現代看護学では普遍的であるといえよう。

ケアリングの普遍化可能性についての問題に対してノディングスは直接的に反論していないが、ケアリングを批判的にとらえる研究者への反論として、「ものごとを徹底して関係的にとらえる見方は、道徳の英雄的行為を強調せず、むしろ道徳が相互に依存していることに力点

を置きます。」⁴¹⁾と述べ、積極的に他者に応答する能力が求められると共に、義務だけではなく責任を再定義するという。これは、ノディングスの述べる自然なケアリングと倫理的なケアリングの関係性を規準としていると考えられる。

この倫理的なケアリングと自然なケアリングをケアの念頭に置くことで、看護におけるケアリングは倫理的な視座と感情的な視座の両義性を持つことが求められることになり、クーゼの述べる危険性を考慮しながらも、患者をケアリングすることは可能であると考えられる。

また、ハルトの述べる3つの水準については、看護におけるケアリングの観点からも異論はない。ハルトの指摘する、「望ましいかもしれない関係性の構築」については、ノディングスは、自然なケアリングと倫理的なケアリングの説明において、望ましいケアリング関係が構築できない場合においては、専門職の役割として倫理的ケアリングが必要なことを認識した上で、そこから自然なケアリングに発展する可能性を述べており、この自然なケアリングと倫理的なケアリングの関係性をもって「望ましいかもしれない関係性の構築」が図られると考えられる。

ノディングスは、ケアする人がケアされる人へ専心没頭することや恣意性を持つことに対する危険性を問う批判に対して「専心没頭」を、「投げ入れではなく、受け容れを含んでいる」とし、その人と共に感じたりすると述べる。そして、それはそのように仕向けられるのではないし、それを他人事のように感じるのではないと述べ、「そのように感じたりすることは、自分自身のものである。しかし、それは、部分的に、しかも一時的に自分自身のものにすぎないのであって、貸し与えられているのである。」⁴²⁾と述べる。

ノディングスは、専心没頭について、ケアされる人の立場に立つことなく、ケアする人自身の中に、ケアされる人を受け入れ、ケアされる人と共に成長に向かって歩むことであるとしているのである。

すなわち、ケアする人が、自分はケアしていると思いこんでいたとして、そのケアリングをケアされる人が受け容れなければ、それはケアリングではないという構造が成立するからである。このことから、ケアリングとは一方向的なものではなく、相互性が存在し、ケアリングが、この関係性の成立を目指す行為であることこそがケアリングが理想的な関係性に陥るだけではなく、現実的な行為の積み重ねを求める看護師の態勢であると考えられる。

IV. おわりに 看護におけるケアリングとは

看護師が患者に向けるケアリングは、患者の目指す成長である回復やセルフケア能力の獲得のみならず、ケアする人である看護師自らの成長をもって成立する概念である。看護とケアリングの関係性には、まずもって、看護の専門的立場にたった公平性やエビデンスに基づいた知識・技術を提供することを前提とする。そして、患者のケアに対しては、その看護師の持つ道徳や看護観・患者観といったものを基に患者に向き合う全体的な態勢とすることが看護におけるケアリングの中心的な理念であると考えられる。

ケアという関係性は看護師が患者に意識的・無意識的におこなっている行為の中に存在する⁴³⁾。その中にあって、ケアリングする看護師はケアする人として、患者を客観的にとらえるその時においても、主観的に患者と同じ方向を見つめるという二つの視点で看護を実践していくことが必要である。この関係性はその患者、その時、その場面によって個々に変化するものである。そのことを正確に読み取り、実践の意志決定を判断できることが、看護における専門的なケアリングの一つと言えよう。

ワトソンは、「ヒューマンケアというものは、看護婦・患者個人の双方と時空のレベルとを規定する行為で、真剣に研究し、考え抜き、実行しなければならず、また健康や不健康の際に人間的にケアが進められていくプロセスと、人間としての患者についての意義を発見し理解を新たにするために知識と洞察力とを追究するという認識論に関わる行為である。(…中略・引用者…)患者個人と看護婦が、それ自身で価値ある目的であるという面に光が当てられるようになろう。つまり、人間性が脅かされる場面において人間とケアを維持するのに必要な条件を形作るものこそ、人間を主人公にした『間主観的』であり相互依存なプロセスである」と述べる⁴⁴⁾。ワトソンは、ケアリングを日常的なケアの中で、患者をケアすることに対する態勢として埋め込まれており、この目には見えない関係性は、文脈としてあらわすことが困難な現象を見つめ続けなくてはならないという行為であることを示している。

また、ケアリングを構成する要素としてローチは、「Compassion: 思いやり」「Competence: 能力」「Confidence: 自信」「Conscience: 良心」「Commitment: コミットメント」5つのCをあげている。これらはケアリングを構成する要素として相互に重なり合う。コミットメントはその他の4つのCの裏付けであると同時に統合された結果としてコミットメントが成立すると述べる⁴⁵⁾。このような

ケアリングを実践していく結果として、患者の目的を単に達成させるだけではなく、患者自身をケアする人へと成長させることを通して、看護師自身の成長を希求することが看護におけるケアリングの責務であると考えられる。そう考えれば、クレーゼの述べる感情に任せたまのケアリングという批判にも耐えうるケアリングと看護の関係性が構築できるのではないだろうか。

西田は、看護におけるケアリングについて、看護師としての生の意味に気づき生きることには他ならないと述べ、人間としての目的について気づき生きていくことを看護師として相手をケアすることで自己の生の意味に気づくのであるとしている。また、「看護師として相手をケアしていく中に自分が現れるのである。ケアしているときに私になっているともいえる。このように考えると、〈ケアリング〉は学習したり訓練したりすることでその能力が追加されて増えるものではなく、看護という〈ケアリング〉を実践する中で、自己の内側から湧き上がってくるものである。だからこそ、それは看護師としての自己の存在を根底から支えるのである。」⁴⁶⁾と述べている。

看護師の成長は、数値的評価といった目に見える文脈のみに留まらず、多くの時間をケアリングの態勢をもったケアを積み重ねていくことを通して、達成していくことができるのである。

そして、日々のケアリングの態勢をもったケアを内省していくというケアリングを目指した行為が看護師を支えていくのである。この視点に立って考えれば、クレーゼが述べるケアリングの限界や、ケアリングが例え科学的に証明できない曖昧な概念であるとしても、ケアリングは、今、病いと戦う患者に希望と癒しを与え、それを支える看護師の成長を促していると考えられ、看護におけるケアリングの存在と重要性を否定する明確な根拠とはならないと考えられる。

本論文は看護学教育研究学会 第14回学術集会で発表したものに加筆修正を加え論文化したものである。

文 献

- 1) 筒井真優美. 看護学におけるケアリングの現在. 看護研究 2011; 44(2): 115-128
- 2) 小林道太郎他. 看護倫理に関する歴史的概観. 大阪医科大学看護研究雑誌 2012; 2: 65
- 3) ジーンワトソン著 監訳者筒井真由美: 看護におけるケアリングの探求—手がかりとしての測定用具—, 日本看護協会出版会 53, 東京, 2003: 53
- 4) 大西和子, 岡部總子編: 成人看護学概論 第2版,

- 東京, ヌーベルヒロカワ, 2009. (第IV章成人に看護に使用される理論, モデル): 168-175
- 5) 筒井真優美, ケアリングの概説, KEIO SFC JOURNAL, 2018; 18(2): 140
 - 6) 日本看護協会. 看護にかかわる主要な用語の解説—概念的定義・歴史の変遷・社会的文脈—, 第1版, 東京, 社団法人日本看護協会, 2007: p. 14
 - 7) ヘルガ・クーゼ著, 竹内徹 村上弥生監訳: ケアリング 看護婦・女性・倫理. 第1版. メディカ出版, 東京, 2000: 180-192
 - 8) ミルトン・メイヤロフ著, 田村真也, 向野宣之訳: ケアの本質—生きることの意味, 東京, ゆみる出版, 東京, 1998: 13
 - 9) ネル・ノディングス著 立山善康訳 他編著: ケアリング 倫理と道德の教育女性の観点から, 晃洋書房, 東京, 2000. pp. 14-15
 - 10) ヘルガ・クーゼ著 竹内徹 村上弥生監訳: ケアリング 看護婦・女性・倫理. 第1版, メディカ出版, 東京. 2000: 183
 - 11) 同上 p. 184
 - 12) 佐藤聖一. 看護におけるケアリングとは何か, 新潟青陵学会誌, 2010; 3(1): 11-20
 - 13) メイヤロフ. 文献7) p. 26
 - 14) 同上 p. 70
 - 15) ネル・ノディングス文献8) pp. 14-15
 - 16) 同上 p. 29
 - 17) 同上 p. 36
 - 18) 同上 pp. 50-51
 - 19) ヘルガ・クーゼ. 文献6) pp. 179-183
 - 20) 同上 p. 204
 - 21) 同上 pp. 190-191
 - 22) 同上 p. 192
 - 23) 同上 p. 199
 - 24) リチャード・E・ハルト・Jr. 齋藤勉訳. 教育的ケアリングについて, 教育哲学・道德教育研究 1998; 11: 4
 - 25) 篠原助市: 新教育学概論, 富士書店, 東京, 1948: 63
 - 26) リチャード・E・ハルト・Jr. 文献23) p. 7
 - 27) ネル・ノディングス文献8) p. 129
 - 28) 同上書: p. 7
 - 29) 同上書: p. 147
 - 30) 同上書: p. 125
 - 31) ヘルガ・クーゼ: 文献6) pp. 191-199
 - 32) ヘルガ・クーゼ: 文献6) pp. 191-192
 - 33) ヘルガ・クーゼ: 文献6) p. 158
 - 34) 佐藤岳詩. ヘアの普遍化可能性原理の形式性について, イギリス哲学研究 2010; 32: 57-71
 - 35) 新納美美. 看護学における倫理の基礎とその課題: 看護覚え書からの検討, 日本看護倫理学会誌 2017; 9(1): 3-5
 - 36) キャロル・ギリガン著 翻訳岩男寿美子: もうひとつの声—男女の道德観のちがいと女性のアイデンティティ, 川島書店, 東京. 1986: 100
 - 37) 葛生栄二郎. ケア倫理の普遍化可能性, 日本看護倫理学会誌 2013; 5(1): 3-11
 - 38) 小野谷加奈恵. N・ノディングス『ケアリング』におけるケア論の批判的検討, 熊本大学倫理学研究室紀要 2010; 5: 68-90
 - 39) パトリシアベナー, モリーサットフェン, ヴィクトリアレオナードら, 訳 早野 ZITO 真佐子: ベナーナースを育てる, 医学書院, 東京. 2011: 255-256
 - 40) 同上 pp. 42-44
 - 41) ネル・ノディングス, 監訳 山崎洋子, 菱刈晃夫: 幸せのための教育, 知泉書館, 東京; 2008: 45-46
 - 42) 同上 p. 47
 - 43) ジーン ワトソン著 監訳者筒井真由美. 看護におけるケアリングの探求—手がかりとしての測定用具—, 日本看護協会出版会, 東京; 2003: 53
 - 44) ジーン ワトソン 稲岡文昭他訳: ワトソン看護論—人間科学とヒューマンケア, 医学書院, 東京; 1992: 40
 - 45) M.S. ローチ 鈴木友之他訳: アクト・オブ・ケアリング—ケアする存在としての人間, ゆみる出版, 東京; 2006: 99
 - 46) 西田絵美. メイヤロフのケアリング論の構造と本質, 佛教大学大学院紀要教育学研究科篇 2014; 43: 46-48